徳島新聞　平成27年7月31日

時評 とくしま

実質的な介入の続行を

「学校予防教育」の行方

山崎　勝之
鳴門教育大学院教授

本欄で徳島発「学校予防教育」を紹介してから1年半がたつ。子どもの健康・適応問題を抜本的に予防する教育が、全国的に普及の緒に就いたという話だった。

この間、この教育はどのように展開したのだろう。徳島県内では教育委員会の支援は変わらず手厚い。藍住、北島両町では全小学校で予防教育が継続実施されている。

愛知県、岐阜県、福井県、京都府、岡山県、香川県でも予防教育の実践校が誕生した。予防教育が学校文化となり、生活の隅々まで健全化の波が押し寄せたという報告も届き始めた。

鳴門教育大が開発したこの予防教育は、当初より学校現場に草の根のように広がることを目指してきた。トップダウンで下りた教育は、現場では効果を上げず、無駄に労力と時間が費やされるばかりという例を幾度となく見ている。

協議会を設け、精度の低いアンケートを繰り返したり、注意喚起の文書を送りつけたりと、行政絡みの試みは形骸化し、実質的な教育介入には及ばない。予防教育は、これらの諸活動とは一線を画し、実質の付与を必須の要件としてきた。

近年、いじめ問題などで世の評論家を批判する向きが目立つ。口は達者だが、実際の問題解決には力を貸さない。研究者も似たところがある。最近、著名ないじめ理論を提起した研究者がこれまでの実効ない発信を懺悔した書籍に出合った。潔い態度だと感心したが誰もがそうではない。

理論を説く人、批判を展開する人は、それ以上に実践的介入を果たし、己の信念の真偽を現場で問うべきだ。実質がなければ人前でまた教育を語らじ、という気迫を全身にみなぎらせてほしい。

海外の研究者は同時に尊い実践家であることが多い。私の同僚もそのような研究者だ。フィンランドの9割以上の学校で斬新ないじめ教育を展開するサルミヴァッリ博士、米シカゴから世界をリードする新教育を統括するワイスバーグ博士。博士らの顔を思い浮かべるたびに、本県発の予防教育の軌道には誤りはないかと身が引き締まる。

抜本的な予防を目指す予防教育は、いじめ、不登校、校内暴力など学校が抱える現代的課題の根っこには同一の問題があると究明した。それなら話は簡単だ。問題をもたらさない根幹を予防的に育てればよい。いじめなど各問題に特化する教育にこだわっては、労力をかけた継続的な介入はおぼつかない。

予防教育の来た道を振り返ると、熱い思いと主張の連続となる。しかし、その主張も詮なきこと。実質的な介入のみで勝負だ、ということを再確認したい。

現時点で7府県。47都道府県の隅々まで普及するための難路は、道辺の花木を愛でて歩こう。

※本ファイルの著作権は徳島新聞社に帰属します。記事・本文・画像の、無断転載は固くお断りいたします。